

題材法話

本年もこうして総会を迎えることが出来ましたこと有り難いことと存じます。さて、昨年の暮れに、財団法人日本漢字能力検定協会が恒例の今年の漢字として、「偽り」という字を発表しました。

この字が選ばれたのは、残念ながら偽りの多い年であったと言うことであり、その代表的なものが食に関する偽りでした。

さかのぼれば、「雪印」「不二家」「北海道の白い恋人達」と偽造が相次ぎ、昨年は、「ミートホープ」「赤福餅」「船場吉兆」と確かに偽りの連続でありました。

○偽造騒動の中で
しかし、私はこの一連の騒ぎの中で、なにか「食べ物」についてのひとつと大事な部分、本質的な問題が置き去りにされているように思われるのです。

賞味期限が切れた赤福餅を、捨てることなく再度加工して



食べさせたいこと自体は勿体ないの精神から言えばむしろ推奨されるべき事です。また、九州産牛を但馬牛と偽りました。牛の命を頂戴することにおいては、なんら差はないはずで、もちろん、「赤福」が勿体ない精神から偽造を行つたわけでも、船場吉兆が牛の命を一つに見て偽造を行つたわけでもありません。

赤福も船場吉兆も、老舗の信用を逆手にとって、製造日を改ざんしたり、安価で購入できる牛肉を使つて不当に利益を得ようとしたもので、その発想は全く利己的であり、社会的に許されるものではないと許されません。

○賞味期限で何？
まず一つは、私達日本人が、あまりにも食べ物を始め、ものを粗末にしすぎてきているという事です。赤福は賞味期間を



過ぎた餅を偽装して販売しました。賞味期限とは別に消費期限というのがあります。消費期限は、それを過ぎて食べたなら人間の体に問題があるという期限で、もちろんそれを超えて食べることは出来ません。

は、おいしく食べることが出来る期間という事で、期限を超えて食べても消費期限までなら体には全く問題ないのです。

○信じがたい食料の無駄
現在、豊富な食品に囲まれた日本では飽食の時代が続いており、「一食べ残し」や「一食



糧廃棄」がどんどん増え続けています。東京都では毎日捨てられる残飯の量が6000トンにもなり、これはごみ収集車約2000台分の量で、アジアで普通に生活をする人たちの約500万人分の食事です。

分の日本全体を総合すると、私達は一日の食べ物の約4分の一を捨てていることに分り、これは世界で食糧が不足している国に援助されている食料全体の約70%に当たります。

に信じられないことを実際に私たちが毎日の生活で行っているのです。食べ物には毎日ふれていて、当然、美味しいものだけを食べて、消費期限どころか賞味期限が過ぎれば「はい消費」されているのです。その感覚を逆手にとり、偽装で不当な利益を得ようとしたのが赤福ですが、その偽装をさせる土壌を私達自身が創り上げてきているのか。以下次号

